

PART 2.

妻と孫を
相棒に

「ジジ」の単独猪猟

神奈川県 田宮 治



地元の狩人達の力を借りて。右が筆者と孫

① 悔やみきれない愛犬の死

● 何で、カモシカなのだ？

それは、決して忘れて通れなくなった平成十五年十一月十五日、狩人なら何歳になっても胸踊る初猟の日のことである。何日も前から銃の調整、車の点検、猟具の点検、そして愛犬の調教等々を済ませ、そのうえで「あの山の山がよい」とか「いや、あの沢のあの峰には必ず居る」など、まるで小学生の遠足気分であったのであるが…。

十一月十五日は、あまり思い返したくない日になってしまったが、それは失敗と言っても避けて通れない、防ぎようのない失敗で、関東地方の狩人なら、おそらく誰もが味わったことのある苦い事柄かも知れない。

この日は、群馬県の四万温泉に泊まったの、二日間の猟程で「必ず獲れる」と確信しての出猟

であった。朝六時、前年も大獲をゲットした特選の猟場に着いた。少し早い、いつものように車の中で「おにぎり」で朝食をとるが、気が逸つてあまり食欲がない。妻と孫は、そんな私におかまひなく、よく食べている。立木に全犬を繋ぎ、軽く食餌をさせるが、犬達も私同様あまり食べない。

天気は快晴で、少し動くと汗ばむほどである。準備OK、気分も最高。一番手を目指して来たので、ほかに入山者はいない。その場所が林道の終点となっているので、その場から「よし、頑張れ!!」と全犬を放す。

先犬ブルを追いかけるように、出峰のカーブを小道伝いにすごいスピードで走り去った。「ケガをするなよ、無理するなよ!」は、止め犬猪では必ず頭をかすめることで、犬達の元気な姿を祈る瞬間でもある。

山々は、今が見ごろの紅葉で実に美しく、久しぶりで良い気分になってしまふのだが、猟で大切な「見通し」は最悪である。今日は、咬みのベテラン竜号(一三歳)と奈智ちゃん、それに「起こし」「咬み」「絡み」クマ、シ

口、ブル、ミス号で、イノシシ
ささ居れば、必ず獲れるメンバ
ーである。

全犬、少しばかり張り切りす
ぎのようなスピードであるが、
連絡よく、見えるか見えなくな
る範囲を小気味よく狩り進んで
いる。大山なので、ヤマドリ猟
の感じで沢を奥へ奥へと進むこ
と三〇分ほどで、イノシシがい
つも飛び出す岩場の上の倒木の
多い所に着いたが、今日は寝て
いないようである。

「留守ですか？」と、しばらく
立ち止まり、汗を拭きながら
周りを見渡すと、犬達は全犬そ
の周りにはいない。「奥に居るな
い」と思う間もなく、ブルとシ
口の連続鳴きである。よし、居
たな。

「さあ、出て来るか？」と待つ。
下の沢まで一〇〇mほどは急な
坂だが、下草はない。上は、い
つもの年より葉が落ちておらず
に、見通しが利かない。下を跳
ぶぶのに賭けて待つこと二分、
三分、五分……。全犬が追い鳴き
で奥へ行ってしまったようで、
何も聞こえなくなる。

この山は、二〇〇〇m近い高
さなので、上を越えればダメで

ある。おかしいなあ、この山で
は沢に落とすはずなのに。

無線で「淳、どうぞ！ 聞こ

えるか？」と、助けを求めると、
「隣の沢の奥で盛んに鳴いている
よ」との返事だった。しかし、
隣の沢も奥を越えられれば同じ
でダメである。そう思いながら、
ゆっくりゆっくり様子を見なが
ら、今登って来た道を戻ると、
隣の沢の入口に近づいている
と、犬達の鳴き声がどんどん
近づいて来るではないか。

おかしいなあ。シカか、それ
とも中物のイノシシか？ など
と思いつつも銃を握りしめ、
声の方向に一目散に走った。し
ばらくすると、声は止め鳴きに
変わった。やっとなめたか。

鳴き声が全く動かなくなつた
ので、「よしよし」と思っている
と、「パパ、聞こえますか？ ど
うぞ」と妻の声。「どうぞ」と言
うと、車のすぐ奥の所で、犬達
が大騒ぎだと言う。わかった。

あとは、元来た道をまっしぐら
現場に近づいて、全犬
が集まっているようで、何とも
賑やかではあるが、そこは山の
五合目辺りで、沢ではなさそう
である。「おかしいな」と思いな

からも銃を確認し、いつでも撃
ち込める態勢で一歩また一歩と
進む。

よし、第一号いただきだ。カ
ーブを曲がり、そつと覗き込む
と、何とそこには丸々と太った
白っぽい角のある大物が、岩場
にニョッキリと立っているでは
ないか。「あッ何だ、これかよ」
と、張りつめていた力が全身か
ら抜けていった。そして、大汗
を拭きながらV字の前平から、
しばらく呆然と眺めていた。

がっかりしながらも、すぐ近
くの車まで行き、銃を置いて妻
と孫に話をし、「カモシカを見せ
てやる」と、前の道まで連れて行
き、「あそこ、あそこ。シロの前
の岩の上」と指差した。孫も初
めて見る大きなカモシカにびっ
くり。三人でワイワイ言ってい
ると、「何してるんだよ、ジジ」
とでも言いたげに、咬み止め犬
の竜とクマが迎えに来た。

「よしよし」と頭を撫でながら、
二頭をすぐ傍の木に縛る。二頭
は、「それはないよ」とばかり、
現場に戻ろうと必死である。V
字の谷の反対側のカモシカの立
っている所までは、小川を挟ん
で五〇〜六〇mで、イノシシな

らばちょうどよい距離で、これ
以上の条件はないのであるが、
まことに残念である。

妻と孫に「お前達は、ここで
見ていなさい」と言い残し、私
はロープを腰に、やっとの思い
で岩山を登り、断崖の上に出た。
一歩間違えばとても危険な場所
だが、仕方がない。

用心しながら犬に向かって「よ
し、来い来い」と、一頭ずつ呼
んでは引き綱を付け、すぐ近く
の木に縛るのだが、足場が悪い
うえに、こんなときの犬の力の
強いこと。やっとの思いで、二
回に分けて引き下ろした。

全犬を無事に車に収めたとき
は、全身汗びっしょりで、力ま
で抜けた状態だった。カモシカ
に絡むと、決まってこうしたこ
との繰り返しであり、何とも困
った問題である。かと言って、
犬達は「何でこうなるの？」と
思っているに違いないし、決し
て犬達を怒ってはいけな。孫
には、「今日は、カモシカ君の勝
ち！」とおどけて、私はドリ
ンクで一服。

汗をかいたので、着替えをし
ていると、下のほうから車の音
がして、ワゴン車が近づいて来



ジジと最高のパートナーの孫

て止まった。車には、夫婦らしいハンターが乗っており、「どうですか?」と話しかけてきた。「孫とカモシカの観察会していました」と、これでの経緯を話した。すると、感心したように「そんなに近くに居たの?」と訊くので、カーブの先の向こう平の岩場に今も居ること、そのカモシカは大きく、白っぽい色であることを話した。その方は、さらに感心され、色々話をされた。

人格も立派な方で、指導員をされているとのことであった。私も、新潟で兄が指導員をしていること、このジジ・ババ、孫の三人でよくイノシシを撃ち獲ること、楽しみながら猟を行っていることなどを話すと、犬箱を覗き、「犬が良いのだね」と、またまた感心の様子であった。孫は得意になつて、昨年獲った大猪の話を、まるで昨日のことのように話していた。孫にと

っては、昨年この沢で獲った大猪の印象が強く、あんなことまで、昨日のことのように覚えていたのである。

それは、ミスが腹を二〇cmも切られたことであるが、このときにも、幸いにもミスは牝犬のために、おっぱいのタルミ分を切られ、上皮部分の負傷ですみ、すぐに治ったのであるが、孫はそんなことまで話していた。

「それでは、またね」と、その方々は帰って行った。なぜか、新潟の兄に会つたような、とても良い雰囲気の方であり、心が温かくなった。

「よし、今日はこれで猟はおしまい。温泉だ、温泉に行こう」と孫をせき立て、時間はまだ早いが、四万温泉へと向かった。途中で昼食をとったり、風景の良い店でコーヒーを飲んだりしながら、早めにホテル「たむら」に入館した。初猟のため、ジジが精一杯奮発したのである。

「思いつきり楽しもうぜ!」と言うと、孫もこの日の「たむら」とか、山梨県の「石和観光ホテル」、栃木県の「鬼怒川観光ホテル」などは、ずいぶん気に入っているようで、「やった」と、

飛び上がって喜んでいる。こうした所にも、餌をすればこそ来られるのだと、しみじみ幸せを感じた。

その夜は、ホテル内の店で、カモシカ君の話を肴にビールを重ねた。孫は、ジューズ片手に、何だかんだと食べているが、例え獲れなくても、孫のそうした姿を見ているだけでも実に楽しい初猟日であったと言える。

特に気に入っているのは、このホテルの谷川に面した露天風呂で、そこから見える川面の景色が実に素晴らしい。孫と何度も入って、爽快な気分に入る。

●ありがとつ、シロ...

次の日の朝、「今日こそイノシシを車に積むぞ!」と、八時頃に四万を出る。方向を変え、気分を変えて暮坂峠近くの沢に入る。遅くなってしまったため、どの沢にも先客があり、やっと入山者跡のない、かなり大沢の車止めで車を止め、全犬立木に繋いで食餌をさせた。

林道が奥に続いているようで、山並みは良い。初めて入る山だが、全犬を放して林道を二〇分ほど進むと、作業用のブルドー

ザーが止めてあった。そこから道はなくなり、沢伝いの獣道である。作業者が入っているの、獵人は入っていないのでは……と思われた。

幸い、今日は作業は休みらしいが、イノシシは居るのだろうか？ などと考えながら、それでも居るとしたら、この辺からだ……と思っていると、クマとシロの鳴き声である。「よし、いたぞ」。見通しの利かない沢から這い上がり、何とか杉の倒木の上に立つ。それでも、見通しはあまり良くない。

犬達は、全犬付いているようだが、何か変だ。少しずつ奥のほうに移動しており、止められないようだ。V字の岩場が多い場所なので、イノシシなら沢に落とすはずだ。どうしたのか？ と思っていると、止め鳴きに変わった。

「よし、止めたな」……。ひどい藪を、鳴き声を頼りに必死に近づき、やっとの思いで小峰を横切り、覗き込むように止めているところを確認する。……と、何と、またしても大きなカモシカではないか。しかも二頭である。「今度こそは」と握りしめていた

銃を抱え、がっくりである。

「どうしたのか」と、さらによく見ると、そこはどこからも近寄れそうもない断崖で、周りト上から犬達が吠えていて、二頭のカモシカは中央の岩だなに立っている。さて、困った。汗を拭きながら考えたが、全く打つ手が無い。ここは一番、私が引き下がり、犬達が諦めて帰って来るのを待つか、と一歩ずつ帰りにかかった。

犬達は、高い所からその様子を見ていたに違いない。四、五歩も歩かないうちに、シロとブルとクマの物凄鳴き声があったので振り返ると、まさに上からカモシカに飛びつく三頭が目に見え込んだ。

「しまった!!」と思う間もなく、もつれるように三頭が一頭のカモシカに咬みつき、そのまま二〇m以上はあるかと思う岩場を真つ逆さまに落下した。岩場の半分ほどの高さの所に岩が出ていたので、そこでバウンドし、クマが吹っ飛ぶが見えた。その下の沢は全く見えないが、すぐまた鳴き出した。

座り込んで、がっくりしている場合ではない。われに返って、

蔓につかまりながら谷に下り、近づいて見ると、何と三頭が元気にカモシカに食い下がっているではないか。夢中で引き綱を出してプルを引き離し、傍の立木に繋ぎ、次にシロ、そしてクマと、やっとの思いで立木に繋ぐと、木の枝を切つてそれでカモシカを追い立て、逃がしてやった。

ヨロヨロしながら立ち去るカモシカの姿を見て、犬達は「何で？」と大騒ぎである。その犬達の所に座り込み、三頭を抱き寄せて「よしよし、元気だったか？ よしよし」と何度も何度も頭を撫で、一頭ずつ手で押さえて「骨折」などを注意深く調べたが、不思議と皆元気で、うれしそうに私の顔を舐めようとしている。

とても信じられないが、皆無事で何よりだ。大汗でびっしょりの顔と、谷川で濡れた体をタオルで拭きながら、どっかとお腰を下ろし、犬達を撫でていると、ミスと奈智、竜達も戻って来た。ひとまず、全犬を繋いでケガを調べたが、心配はなさそうである。愛犬達への思いは、こうしたことを重ねることで愛情に変わ

わっていく。そして、可愛くて仕方がないようになるのである。「どうしようもないなあ、カモシカ君では」とつぶやいた。大猪との闘いよりもよほど疲れるのに、中身は何もないのである。犬達にしても、またしても目の前で逃がしてやるカモシカに、「何でだよジジ、どうして逃がすんだよ」とでも言っているようにヒンヒンと鳴き、後を追いたがっている。

愛犬達は、完璧にやることをやったのであり、これを責めるのは人間のわがままである。あの断崖をもともせず飛びつき、咬み止めて俺に獲らせようとしたのだ。まさに命がけである。それにしても、よく助かったなあ……。目頭が熱くなった。

よくやった、よくやった。さあ帰ろう。思い直して、妻と孫に無線で結果を知らせ、林道を六頭引き連れて帰るので、その道を登って迎えに来てくれるように頼んだ。しかし、一本道なのになかなか二人が来ない。無線を入れても返事も無い。

心配しながら、とうとう車の見える所まで行くと、二人は車に乗っているではないか。窓も開



在りし日のシロ号(右)。左はアカ号

けていないので、「どうした？」と訊くと、二人で途中まで行つたが、大きなカモシカと出合つて、三〇mほどの距離で睨み合ひになったという。

「ほんと、死ぬ思いだったよ。逃げて逃げて、もう一步も動けないよ」と、よほど怖かったと見え、顔色も青ざめていた。まだ恐怖心が残っているようで、車から出て来ない。

仕方なく、全犬を車に収める

と、から元氣を出して「もう大丈夫だ。あのカモシカを止めたのだよ。相当参つてしまつたので、あの道を逃げて来たのだらう」と二人を安心させるが、内心、あのカモシカは半矢状態なので、ひよつとしたら：などと考えると、山の中の道を迎えに来させたことを悔いた。

「よし、これで終わりにして、いつもの温泉で遊んで帰ろう」と言うと、孫もやつと笑顔を取

り戻した。「まあ、こんなこともあるさ」と、やりきれない気持ちで温泉で癒し、食事をしたり、孫には好きな物を買つてやり、私はジョッキ二杯を飲み、帰りの運転は妻に任せた。

この時期の関越自動車道は車の量が多く、家までは四時間もかかつてしまった。孫は疲れてぐっすり寝込んでいたので、抱いて車から降ろし、そのまま寝かせた。

その後、愛犬に食餌をと、一頭ずつ箱から出すが、シロは私が覗いても顔も出さない。おかしいな？ いつも元氣に飛び出して来るのに：と思つて扉を開けるが、まるで居ないようだ。暗い箱に「シロ、シロ」と手を入れてギョツとした。

シロは居るには居たが、足をピンと伸ばして全く動かない。引き出して見ると：、シロはすでに死んでいた。急いで孫が寝ていた毛布を出し、その上にシロを横たえた。シロの体はまだ温かいが、硬直が始まつていた。

その手足を曲げ伸ばし、大声で「シロ！シロ！！」と呼びながら、何度も何度も胸を押しては体を伸ばし、何とか息を吹き返

してくれと願つたが、シロに変化はなかった。それは、眠るようなシロの最期であつた。

私のただならぬ様子に、妻も家から出て来た。二人でシロの名を呼び、呆然と座り込んで、いつまでもシロの頭を撫で続けた。目頭がジーンと熱くなり、涙が溢れた。

思い返せば、二時間ほど前に、犬箱をカリカリ引っかけ、「キャンキャン」と小声で鳴いていた。シロは、いつもトイレのときにこのような仕草をする。あのとき私は、いつものことだと思つて「シロ、うるさいぞ。静かにしなさい！」と言つていた。

シロは私の言うことをきかんと聞き、それ以後は鳴くこともなく、最期まで良い子で逝つてしまつた。渋滞の高速道路では、どうすることもできなかったらうが、あのときに車を止めて見てやつていれば、「あるいは：」と思うと、シロが可哀相でならぬ。

シロ、ごめん。もう一度全身を撫でた。シロはまだ四歳、ブルとのコンビは最高で、「これからが楽しみだ」と、先ほどの温泉で話したばかりなのに：。



ありがとうシロ!! 平成15年の初猟にて戦死

可哀相で、残念で、無念で、私はシロをいまだ一度抱きしめた。「シロ、本当にごめん」とつぶやきながら。

シロとの様々な思い出が脳裏を駆け巡る。今日だって、カモシカと落ちたとき、お前はその下になったのか。あれだけの高

さから落ちても、お前は何事もなさそうにカモシカを咬み込んでいた。それでも心配になり、シカとの闘いの後に調べたときにも、お前は「キャン」とも鳴かなかった。だから、ジジは喜んでしまったのだ。

悔やまれて仕方がない。シロ、

お前はいつも命を張ってこのジジに楽しみを与えてくれた。それなのに、ジジはお前に何もしてあげられなかった。どうしようもないジジだった。シロの気持ちを考えると、何とも不憫でならない。

今にも目を開け、私に擦り寄って来そうなシロ。もう、取り返しはつかない。シロ、たくさん楽しい思い出ありがとう。こんなジジを許してくれ。本当にごめんなさい…。

●眠れぬ夜に

その夜は、いつまでも寝付けなかった。目を閉じると、シロが現れる。イノシシを獲ると、シロは気の強い犬で、「俺の獲物だ」と、他の犬達に睨みをきかせる悪い子のところもあったが、今はそんな姿までもが懐かしくてならない。相手が大猪のときにも絶対にひるむことなく、背毛を立てての攻撃は素晴らしく、しかも俊敏でケガの少ない子であった。

特に、私を見るその目が可愛く、わが家でただ一頭の白い犬であった。紀州犬には珍しく、仲間とケンカもしない。足が速

くて藪抜けもよく、咬みの強い犬で、大猪の止めにはいつも参加していた。山々を駆け巡った白いその姿は、何とも強烈な印象として残った。

これほど絡み上手なシロだったが、まだまだ元気だったために、そのシロの子はいない。シロにとつて最後の猟となった今日でも、友犬のブルとクマに負けじと、あの断崖をものともせず、咬み倒してやろう飛びついたのである。命を懸けてがちり咬み止めて、このジジに獲らせたと思っているに違いない。もちろん、相手がイノシシであれば完勝であったのだから、ここはシロを褒めてやりたい。「シロ、偉かったぞ。ありがとう。静かに眠れ」と、祈らずにはいられない。

幸いなことに、孫は寝てしまいい、シロの死を知らない。ただ孫は、シロの仕草が可愛いと、ずいぶん気に入っていたので、後日「シロは、ジジの猟友に貸してある」と言って聞かせた。だが、猟期が近づいた頃、「ジジ、シロは元気かなあ。いつ帰って来るの?」と訊く。今は、それが一番辛い。(つづく)